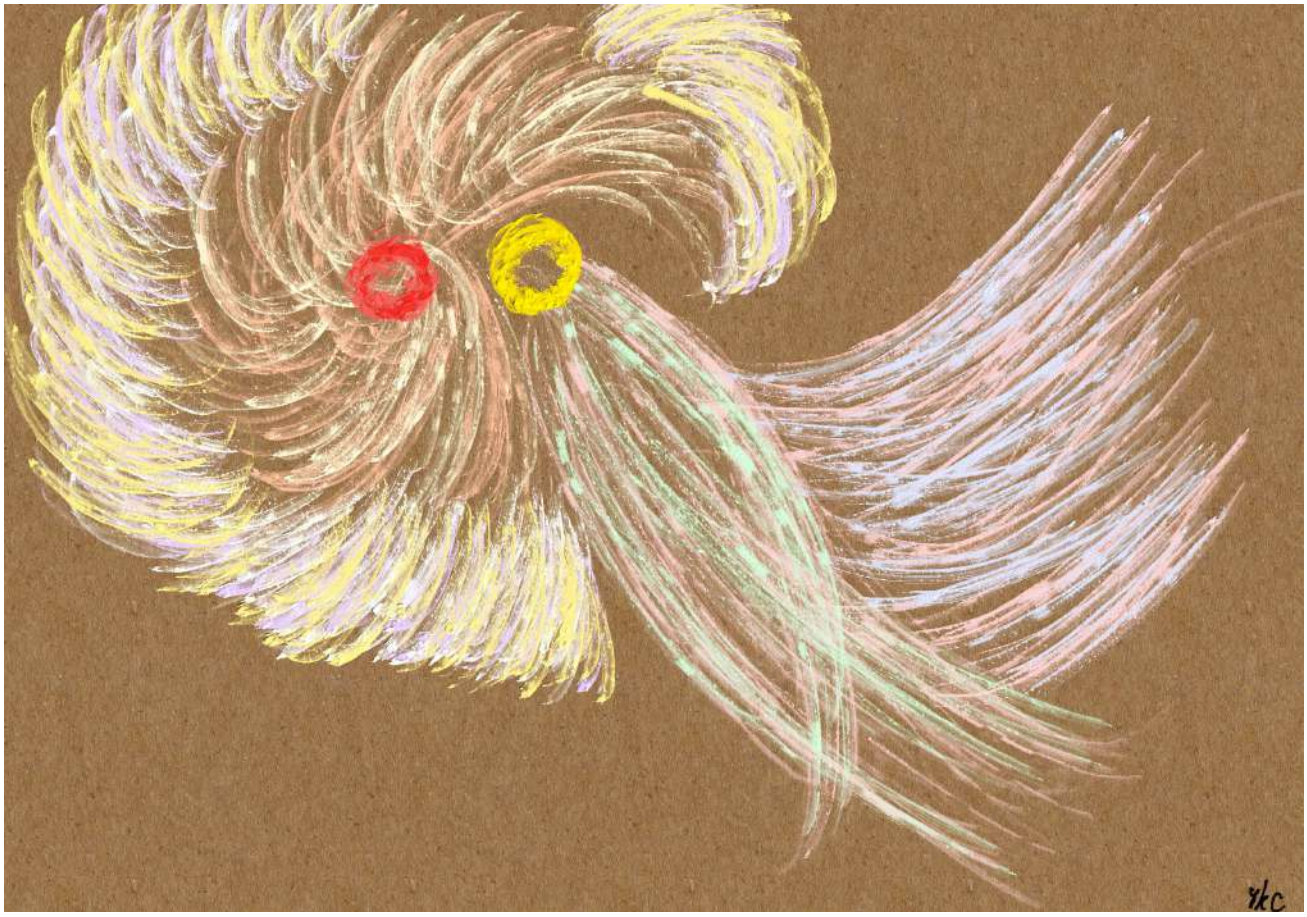
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 316

Website:「発達理論の学び舎」



No.1474 夕暮れの無垢な子供たち_Innocent Children in the Evening

© YOHEI KATO 2020

目次

6301. AI倫理/不可能性を前提にした問いを立てること

6302. 今朝方の夢/上部構造と下部構造

6303.『イラクチグリスに浮かぶ平和(2014)』と『トランセンデンス(2014)』を見て

6304.【日本滞在記】出発の朝に見た夢

6305.【日本滞在記】フローニンゲンを出発して

6306.【日本滞在記】スキポール空港に到着して

6307.【日本滞在記】『セッション(2014)』を見て

6308.【日本滞在記】このリアリティ/『マチネの終わりに(2019)』を見て

6309.【日本滞在記】コロナの検査結果が出るまでの一部始終

6310.【日本滞在記】昨夜の家族団欒を振り返って/八木重吉の詩

6311.【日本滞在記】免許の更新を終えて

6312.【日本滞在記】実家で過ごす穏やかな時間

6313.【日本滞在記】美の危うさ

6314.【日本滞在記】印象的なビジョンを知覚する仮眠体験

6315.【日本滞在記】『クリーピー 偽りの隣人』を見て/犯罪心理学の学習に向けて

6316.【日本滞在記】観照生活と生の実感

6317.【日本滞在記】交差する豊かな時間の中で/父の本棚より

6318.【日本滞在記】『夢(1990)』を見て

6319.【日本滞在記】今日の読書から

6320.【日本滞在記】今朝方の夢/自己超出体験

© YOHEI KATO 2020

6301. AI倫理/不可能性を前提にした問いを立てること

――絶望する者の数が増えることだけが希望である――ホセ·オルテガ

時刻は午後7時半を迎えようとしている。外はもう随分と暗くなっていて、冷たい風が街路樹を揺らしている。街路樹にはまだ葉が付いているが、それらが枯れ落ちるのはもう間も無くだろうか。

新たな生命の誕生まで緩やかに歩みを進めていく街路樹たち。それは自分も同じである。新たな自己の誕生に向けてゆっくりと歩みを進めていくこと。それらは全生命が日々行なっている尊い営みなのだ。

今日は2つほどAIに関する映画を見ていた。改めて、生命倫理(bio-ethics)と同様に、AI倫理(AI-ethics)なるものを考えていく必要性があるように思えた。現代の倫理学において、AIの取り扱いについてはどのような議論がなされているのだろうか。そのあたりがとても気になる。これもまた1つのテーマとして設定しよう。

AI倫理について、成人発達理論を含めた発達学、社会学、政治学などの多岐に渡る分野を通じて考察をしていこう。早速調べてみたところ、MIT出版から“AI Ethics (2020)”、オックスフォード大学出版からは“The Oxford Handbook of Ethics of AI (2020)” “Ethics of Artificial Intelligence (2020)”などが出版されている。それらの出版年がいずれも2020年であることは興味深い。その他にも、“Human Compatible: Artificial Intelligence and the Problem of Control (2019)”、“Race After Technology: Abolitionist Tools for the New Jim Code (2019)”、“Automating Inequality: How High-Tech Tools Profile, Police, and Punish the Poor (2019)”、″Deep Medicine: How Artificial Intelligence Can Make Healthcare Human Again (2019)”、“Artificial Intelligence: A Guide for Thinking Humans (2019)”のような書籍も非常に参考になりそうだ。これらもまた昨年に出版されたばかりであり、AIが提起する問題への高まりを実感する。

映画を単に見ているだけでは知識や思考が深まっていかないため、映画で主題として取り上げられているもの、さらには副主題として触れられているようなものについて、積極的に専門書を通じて学んでいく姿勢が大切かと思う。また逆に、専門書を通じて得られた知識や思考をもとに、映画を

通じて描かれている具体的な現実問題を見て、それに対してまた考察を深めていくようなことが大切になるだろう。映画と専門書とのそうした往復運動をこれからより意識的に行なっていく。

夕食前に入浴をしているときに、何が可能であるかを前提にするのではなく、何が不可能であるのかという前提で議論や実践を進めていくことの必要性をふと思った。現代の諸々の議論や実践は、前者の前提のみに立脚しているものばかりではないだろうか。例えば、仮に人類が集合的にこれまで以上に発達をしたらだとか、仮に格差を無くしたならばといったように、全てが何らかの可能性から出発しているように思えてくる。もちろん、人間には進歩を希求するような衝動が内在的にあるのだろうが、可能性を出発点にした議論や実践は軒並み頭打ちになっているように見える。

そうではなくて、例えば、仮に人類が集合的にほとんど内的成熟を遂げることができないのであれば、私たちはいかなる社会を作り、いかに生きていくのか？経済格差を解消することが不可能であれば、私たちはいかなる経済社会システムを構築し、どのようにそれを運営するべきなのかというような不可能を前提にした問いを投げかけていく必要があるように思えるのだ。

問いは解決策を導き出す方法、そして解決策そのものを規定する。問いにはそのような性質があるのだから、これまで可能性を前提にして立ててきた問いによって導き出されるアプローチや解決策がことごとくうまくいっていないのでれば、これまでにない形で、すなわち不可能性を前提にして問いを立てていくことが重要に思えるのだ。端的には、前提をこれまでとは180度変えたような形で問いを立てていくのである。そうすれば、少なくともこれまでにないようなアプローチが解決策が見えてくるのではないかと思う。

空想的な希望から出発するのではなく、現実的な絶望から出発すること。前者よりも、後者の方がより地に足のついた議論や実践ができるのではないだろうか。スペイン人の哲学者のホセ·オルテガが「絶望する者の数が増えることだけが希望である」と述べたように、現代社会に疑うことなき形で内在している不可能性を直視し、絶望する人々が増えることが、社会に希望をもたらす道を開いていくのではないだろうか。現代人はまだ絶望の中で絶望を直視しておらず、単に絶望の上に浮いているような状態なのだろう。フローニンゲン：2020/10/5（月）19:47

© YOHEI KATO 2020

6302. 今朝方の夢/上部構造と下部構造

時刻は午前6時を迎えた。今、シトシトとした雨が降り注いでいる。辺りは真っ暗であり、気温はとても低い。どうやら今日は1日を通して雨がちの日のようであり、午前中に一度雨脚が弱まり、正午過ぎから夜までまた雨が降るようだ。明日はいよいよ一時帰国の日となる。

今回はアムステルダムから関空に直通の便ということもあり、フライトの時間は午後2時半と大変ゆったりとしているので、朝はそれほど早く出発する必要はない。とは言え、空港には正午には到着しておき、空港のラウンジでゆっくりしたい。今回は、リニューアルしたKLMのラウンジを活用する予定なので、ラウンジがどのように変わったのか楽しみである。

今日は出発前日なので、夜に荷造りをしよう。今回はいつもより大きめのスーツケースを持っていく。この数日、機内持ち込み用の小さなスーツケースと大きめのスーツケースの2つを持っていくことも考えたが、いくら宿泊先が駅近くのホテルだとは言え、2つのスーツケースを持って移動することは大変かと思った。また、仮に雨が降っていた場合、2つの手が塞がっていると傘もさせないだろうと考えた。そうしたこともあり、今回はスーツケースは1つにし、大きいものを持っていくことにする。荷造りを簡単に済ませ、明日の列車の時刻などを調べて、今夜はいつもより気持ち早く就寝しよう。

今朝方は夢が落ち着いていた。少しばかり覚えていることがあるので、それを書き留めておきたい。

夢の中で私は、大学時代のサークルの先輩たちと何かを議論していた。数人の先輩たちが熱心に討論をしていて、私は冷静な状態でそこに加わっていた。時に議論の仲介役のような役割を果たしながらその場にいた。そのような場面があった。

その他に覚えていることと言えば、日本のどこかの県を訪れ、ある街を歩いていたことぐらいだろうか。そこは人口密度が高くなく、それでいて比較的発展していたので、不便を一切感じなかった。そこでも誰かと一緒だったように思うが、それが誰かは覚えていない。今朝方はそのような夢を見ていた。

昨日、矛盾から変化が起こることを見抜いていたヘーゲルの弁証法について考えていた。ロイ・バスカーの考え方と合わせて考えると、矛盾のみならず不在は変化の源であり、それらがなければ変化

がないということだろう。今自分の内側にある矛盾や、今はまだ顕在してない不在に思いを巡らせる。おそらく今回の一時帰国を通じて、これまで見えなかった内的矛盾が姿を現すだろうし、これまで不在だったものが思わぬ形で姿を見せるだろう。そうした内的矛盾や不在を大切にし、ここからの歩みの糧にしていこう。

マルクスは、インテグラル理論の4象限でいうところの右下象限を2つの存在論的な階層構造で捉えていたことが改めて興味深く思った。政治的法律的な構造としての「上部構造」と、生産関係を中心とする経済構造としての「下部構造」の2つである。マルクスは、下部構造が上部構造を規定すると考えていて、それはよく知られたことだが、改めてそれについて考えていた。その考え方は、上向因果(upward causation)であるが、政治や法律が経済構造に影響を与えることは多分に存在しているため、下向因果(downward causation)も当然ながら存在しているに違いない。マルクスが上部構造と下部構造に分けた真意、さらには下部構造が上部構造を規定すると述べた真意について書物に当たって調べてみようかと思う。フローニンゲン:2020/10/6(火)06:39

6303.『イラクチグリスに浮かぶ平和(2014)』と『トランセンデンス(2014)』を見て

時刻は午後4時に近づいてきている。今は雨が止んでおり、小鳥たちが穏やかな鳴き声を上げている。空は曇っているが、どこか落ち着いた雰囲気だけはある。

つい先ほど、『イラクチグリスに浮かぶ平和(2014)』というドキュメンタリーを見た。これは、ビデオジャーナリストの綿井健陽監督が制作した作品であり、イラク戦争勃発からその後10年を追ったドキュメンタリーだ。2003年3月、大量破壊兵器保有を口実に米英軍がバグダッドを空爆したことから始まったイラク戦争の当時の様子が生々しく映し出されており、フセイン政権打倒後にもシーア派とスンニ派の対立が起こり、内戦になった。

このドキュメンタリーを見ていくつか印象に残っていることがある。アメリカの空爆が始まる前には、イラクの大半の人々はフセインを信じているようだったが、バグダッドが陥落した後に掌を返すようにフセイン政権の非を咎め始めている民衆の姿が映し出されていた。さらには、開戦前においても、フセイン政権のおかしな点に気づいている人たちもいたことは確かだが、彼らはそれを口に出さず、表情からフセイン政権に疑念を持っていることが伝わってきた。そのような状況で開戦した後、

すぐさまバグダッドは陥落し、そこで米軍のある兵士が「私たちはイラク人を解放しに来た」ということを微笑みながら述べていたことが印象的だった。

それを見た時に、この戦争が完全なる茶番のように思えたのである。端的には、イラク人も米軍兵も、一方的な信念の刷り込みがなされていて、それがこの戦争をとてもチグハグな虚構であることを思わせたのである。おそらく、こうした虚構性に気づいているイラク人や米軍兵もいたであろう。だが、そうした人々は少数派であり、多くの人たちが虚構の中で争い合い、苦しみ合っているようにいるように映った。

問題は、こうした戦いが虚構の産物でありながらも、それが現実世界（the actual）で行われている実際の戦いであるがゆえに、多くの人たちが犠牲になっているという点である。それは決して見逃すことはできない。人間は、実在世界（the real）に作られた虚構に従って茶番を演じている、ないしは演じさせられていて、それで憎しみ合い、傷つき合っていることが皮肉であり、残酷に映った。

このドキュメンタリーの中で主人公として登場していたアリが、イラクの内戦で殺され、その後、高齢になっているアリの父が、「今のイラク人は騙されている。若者たちは車や物が買えるようになっても平和の実感などないはずだ」という言葉がとても印象的だった。虚偽と見せかけの幸福が蔓延しているというのは他の国、そして日本でも同じなのではないだろうか。イラクを始め、今でも多くの国が長く続く戦争や内乱に晒され、心理的不安の状態を抱えていることを思った。それは個人にとっても社会にとっても、大きなトラウマをもたらす。

このドキュメンタリーを見る前に、昨日からの続きで、今日もAIに関する映画を見た。それは『トランセンデンス（2014）』（原題：Transcendence）という作品である。監督はウォーリー･フィスター、主演はジョニー･デップである。ストーリーは、人類の未来のために、意識を持ったスーパーコンピューターを研究開発している主人公の科学者ウィルが、反テクノロジーを掲げる過激派組織に撃たれるが、妻のエヴリンの手によって、ウィルの脳がスーパーコンピューターにアップロードされるところから始まるそこからは、コンピューターの中で生き続けることができるようになったウィルの意識が、インターネットのネットワークの力によって、地球上の膨大な知識を手に入れ、予想もしない進化を遂げていく形で物語が進む。

本作のタイトルである“transcendence”というのは、「超越」という意味であり、これはもちろん、人工知能が人間を超越していくというのがわかりやすい意味だが、人工知能の機械学習によって自己が自己を絶えず超えていくという意味での超越も含まれているだろう。物語の最後のシーンにおいて、AI、ナノテクノロジー、量子コンピューターが組み合わさって実現されるであろう、ウィルが思い描いていた地球の理想的な姿がとても印象的だった。フローニンゲン：2020/10/6（火）16:17

6304.【日本滞在記】出発の朝に見た夢

時刻は午前4時半を迎えようとしてる。今朝方は午前4時に目覚めた、今日はいよいよオランダを出発して日本に帰る。日本に帰るのに緊張しているのか、はたまた興奮しているのか、昨日はすぐには眠ることができなかった。ただし、今朝の目覚めは良かった。

振り返ってみると、日本に帰る前夜はいつも、緊張か興奮かによってすぐに寝付けないことが面白く思う。日本に帰るのに特定の感情がまだ引き起こされる様子を見ると、この先の道がまだ長いことがわかる。

出発前夜に夢を見ていた。夢の中で私は、サッカーの試合に出場していた。私は小中学校時代の友人たちと一緒に、顔の分からない相手とサッカーの試合をしていた。試合は開始からしばらくは硬直状態が続いたが、ある時をきっかけにして、私は大量に得点を入れ始めた。右足左足、そして頭と、色々な形で得点を量産し、それでもなお得点を入れ続けようとしている自分がいた。

得点を何度入れても私は興奮していて、何点入れてもまだまだ得点を決めたい自分がいた。すると、気がつけば私は日本代表のトレーニング施設にいた。そこで私は、日本代表のエースストライカーの選手にインタビューを行っていた。その選手と一緒にトレーニングルームの地べたに座り、和気藹々と話を進めていった。すると途中からは真剣な話になった。

その選手は、私に彼の腕や足を見せてくれた。そこには激しいトレーニングや激しい試合をしたことがわかる勲章のような傷がたくさんあった。先ほどまで笑顔で話をしていたその選手は、突然真剣な表情になり、「僕はその選手に傷があるかを見て、彼がどれだけ真剣にサッカーを取り組んできたのかを判断しています。傷が無い選手？そんな選手はクソですね」と述べた。その言葉はとても印象的であり、私は思わず自分の腕や足を思った。

そこでインタビューは終わり、今度は私たちは実際のトレーニングを一緒に行うことになった。すると、刺青のあるプロボクサーの女性もトレーニングに加わった。というよりもむしろ、私たちは彼女からトレーニングを教わることになった。ボクシング固有の動きは、普段使っていない筋肉を刺激してくれることがわかった。そのサッカー選手も最初はトレーニングの動きに慣れておらず、動きがぎこちなかったが、さすがプロスポーツ選手である。すぐに慣れて滑らかな動きになった。そこからはお互いに意見交換をしながらトレーニングを進めていった。今朝方はそのような夢を見ていた。

夢について書き終えたところで湯船にお湯が張られた。今から浴槽に浸かってゆっくりと体を温めたい。それによって体が目覚め、出発に向けて心も体も準備が整うであろう。今日のフライトは午後2時半であるから、朝はゆっくりと自宅を出発できる。とは言え、少し早めに空港に到着しておこうと思うので、自宅を出発するのは午前9時だ。もう荷造りはほぼ終えているので、出発まではいつものように創作活動に励みたいと思う。1年振りの日本が近づいてきている。フローニンゲン：2020/10/7（水）04:37

6305.【日本滞在記】フローニンゲンを出発して

時刻は午前9時半を迎えた。今、フローニンゲン駅に到着した列車の中にいて、出発の時間を待っている。出発まであと10分ほどになった。

今日は幸いにも、天気予報が裏切られる形で、朝から晴天に恵まれた。自宅からフローニンゲン駅までの道のりは、秋の優しい太陽の光に満たされていた。外気は確かに冷たかったが、朝日のおかげもあり、そして荷物を持って歩いていたこともあり、寒さを感じることはほとんどなかった。今回の一時帰国は結局、スーツケースを2つ持っていくことにした。1つは機内持ち込み可能な大きさの小さなスーツケース、そしてもう1つはそれよりも1回り大きなスーツケースである。

今回の一時帰国に際して、東京で2回ほど対談イベントがあり、大阪でも講演会が1つある。そうした都合上、スーツ1着では着回しができないので、スーツを2着持っていくことにし、ビジネスシューズも1足持っていくことにした今回は何よりも、日本から多くの和書を持って帰ろうと思っているので、いつもは持っていかないスーツケースを持参することにした。振り返ってみると、今から3年前ぐらいの一時帰国の際に、この大きめのスーツケースを1度持って帰ったように思う。

その時には、小説家の福永武彦氏の全集や、川端康成氏の全集、さらには小林秀雄氏の全集を随分と持って帰ったように思う。行きはほぼ衣類しか入っていないこともあり、2つのスーツケースを引いて歩くことはそれほど大変ではなかった。

帰りは本が随分と入ることを考えると、帰りはフローニンゲン駅から自宅までタクシーを使ってもいいかもしれない。どれだけ重たいかを考えて、当日にタクシーを使うかを考えよう。仮に雨が降っていたらその時には必ずタクシーを使おうと思う。

ここ最近は南オランダの主要都市(アムステルダム、ハーグ、ロッテルダム)でコロナが再発しているためか、フローニンゲンも以前よりも警戒意識が高まっているように思える。公共交通機関ではもちろん全員がマスクをしていて、先ほど立ち寄ったカフェでは、店員もマスクをしていた。

あと2分ほどで列車が出発する。アムステルダムのスキポール空港に到着するのは11:55である。今からおよそ2時間の列車の旅を楽しもう。今日は天気が良いこともあり、列車の車窓からは長閑な風景を眺めることができるだろう。車内では作曲実践を行なったり、デスクトップ上に保存してある論文を読み進めていこう。そうした活動に集中して取り組んでいれば、2時間というのはあっという間である。

空港に到着したらまずはスーツケースをKLMのデスクに預けに行く。1つのスーツケースは機内持ち込みできる大きさだが、それも合わせて預けてしまおうと思う。その後、セキュリティーに向かい、セキュリティーを通り抜けたら、KLMのラウンジで寛ぎながら作曲実践をしたり、絵を描いたり、日記を執筆したりする。今回はKLMのビジネスクラスを用いることにし、機内でのベジタリアン食を楽しみにしていたが、事前オーダーができず、今回は1年振りに魚料理を食べようかと思う。

11時間に及ぶフライトでは、映画作品やドキュメンタリーを鑑賞しようと思う。機内食を食べ終えてしばらくしたら、十分な睡眠を取りたい。そうすれば、気がつく頃には関空に到着しているだろう。スキポール空港に向かう列車の中で:2020/10/7(水)09:52

6306.【日本滞在記】スキポール空港に到着して

時刻は午後12:45を迎えた。今、KLMのクラウンラウンジにいる。

フローニンゲンは晴れであったが、アムステルダム上空には雨雲が覆っていて、先ほど小雨が降っていた。今は雨が止み、曇った空をぼんやりと眺めている。

KLMのクラウンラウンジはリニューアルを経て、随分と広くなり、とても快適になった印象だ。しかしコロナの影響もあって、自分で好きな食べ物を取ることはできず、カウンターの前で注文するような形式になっている。とは言え、私はラウンジで何かを食べる気はなく、飲み物だけ飲めれば十分であり、エスプレッソなどは以前と同様に、自分で取ることができるので何の問題もない。

1時間ほど前に空港に到着した時、前回のアテネ旅行の際の空港の状況を思い出し、両者を比較してみた。アテネ旅行は今から2ヶ月前のことであり、当時はもっと人が少なかった。今日もまだ空港を利用する人は少ないのだが、以前よりも数パーセントほど利用客が増えたような印象がある。それでも空港の利用率は25-30%ほどだろうか。

人が少ないおかげもあり、荷物のチェックインは全く待つことなく完了し、セキュリティーも全く待つ必要がなかった。今回は日本という非シェンゲン協定国への移動になるため、出国手続きをする必要があった。そこでパスポートチェックを担当する若いオランダ人の男性と少しばかり話した。

係員:「住んでいるのはズヴォレですか？」

私:「いえ、フローニンゲンです。ズヴォレの出身ですか？」

係員:「いえ、XXの出身です」

私:「えっ、どちらですか？」

係員:「XXです。ご存じないですか？」

私:「いや～、ちょっと知りませんね。オランダ南部のどこかの都市ですか？」

そのように私が尋ねると、その係員は笑い、隣の係員も笑みを浮かべた。そして隣の係員にパスポートチェックをしてもらっていた大柄の中年女性も笑顔を浮かべていた。

何やら係員のその方が生まれたその街は、オランダ人にとって有名な都市らしく、ズヴォレの隣町とのことだった。発音が聞き取りにくく、「カンポですか？」と聞き返すと、「いえ、カンポじゃないです（笑）」と返答され、結局正しい発音はわからなかった。そのようなやり取りがあったことを思い出す。

いつも思うが、これは良い悪いの話ではなく、文化的な差なのだが、日本ではこうした会話がパスポートコントロールの際にやり取りされることはないだろう。ある意味、日本では官僚的な手続きだけがなされ、何の会話もなく速やかに手続きが行われるが、そこには人と人とのやり取りが欠落しがちであり、その場での出会いを楽しむという感覚はない。一方、オランダでは基本的にどのような場においても人と人とのコミュニケーションが成立し、そのコミュニケーションが発生してから完了するまでに時間はかかるが、その場での出会いを大切にするという発想が文化に根差されている。

はて、「一期一会」という言葉はどこの国の言葉であろうか？ということを考える。気がつけば、先ほどの何気ない数分間のやり取りについてつらつらと書き留めている自分がいた。なるほど、先ほどのあのいっときのやり取りは、つらつらと何かを書かせるに値するだけの意味が内包されていたのだと知る。やはり人と人とのコミュニケーションには大切な何かがあるらしい。コミュニケーションに時間が発生したとしても、そこでの時間は貴重な時間であり、それによって自分の心が確かに動き、自己及び世界に関して何か新しい意味を開示してくれるのだと思う。

あと1時間弱経ったらボーディングが始まり、その後11時間後に日本に到着する。日本ではどのような出会いがあり、どのようなコミュニケーションがあるだろうか。それを楽しみに日本に向かう。KLMクラウンラウンジ：2020/10/7（水）13:01

6307.【日本滞在記】『セッション（2014）』を見て

時刻は欧州時間の午後5時に近づいている。機内食を少し前に摂り終え、さらには映画を一本見た。先ほど見終えたのは、『セッション（2014）』（原題：Whiplash）という映画である――監督は、『グランドピアノ　狙われた黒鍵』『ラスト･エクソシズム2 悪魔の寵愛』などの脚本を手掛けたデイミアン･チャゼル――。

これはもう6年も前の映画だが、成人発達理論や教育理論の観点から非常に示唆に富む作品だと思う。端的には、自己主導型の発達段階に到達するための重要な示唆が込められた作品である。

物語は、世界的ジャズドラマーを目指して名門音楽学校に入学した主人公のニーマンが、伝説の教師と言われるフレッチャーの指導を受けることから始まる。しかし、常に完璧を求め、ニーマンに容赦のない罵声を浴びせ続け、絶えずニーマンに限界を超えていくように仕向けていく。そしてレッスンは徐々に狂気に満ちたものになっていく。

作品中、教師のフレッチャーの発言や振る舞いは、一見すると教師のそれではないように思えるかもしれない。実際に、主人公のニーマンに対して体罰とも言えるような仕打ちまでしてしまう場面もある。フレッチャーの狂気じみたレッスンによって、精神を病んでしまう生徒も出てきてしまうほどだった。そうした観点において、現代の教育観では色々と物議を醸すような作品かもしれない。しかしながら、こと真に自己主導段階に到達するという観点で見てみれば、フレッチャーがニーマンにとっての巨大な壁として立ちはだかり、ニーマンが自分自身を、そして教師であるフレッチャーを超えていく上で、そこで実現されている子弟関係というのは極めて重要な意味を持っていることがわかる。

作品を見ながら、ニーマンが突破したような体験がなければ、真に自己をこの世界に在らしめるという発達段階には到達し得ないのだということを思った。ある発達段階においては、それが物理的に実在する師匠ではなかったとしても、狂気的な師匠を突き抜け、自己を狂気の最中において超えていくような体験が必須なのだということを確信させる。他者依存的な自己の残滓を完全に抹殺するためには、こうした極限的な超越体験が不可欠であるということを思わせる。

今、改めてラスト10分の場面を再度見終えた。なんという迫力のある演奏だろうか。最後の場面における、ニーマンとフレッチャーのアイコンタクトと笑み。そこには究極的な繋がり、それは魂の繋がり、あるいはダイモーンの繋がりとでもいうような繋がりを見て取ることができる。果たして現代の教育において、一体何人の人がこうした繋がりを体験したことがあるだろうか。果たして何人の人が、巨大な師匠と本気でぶつかり、以前の段階の自己を木っ端微塵にする形で過去の自分を乗り越えていく体験をしたことがあるだろうか。

この作品が教えてくれることは限りなく大きい。これは今後のゼミナールか何かの学習教材として取り上げることにしたい。今後はこのように、人間や社会を知る上で非常に有益な映画作品やドキュメ

ンタリーを学習教材として多くの人に見てもらうようにしていきたい。それでは今から睡眠を取り、そこからはドキュメンタリーを見たいと思う。関空に向かうフライトの中で：2020/10/7（水）17:05

6308.【日本滞在記】このリアリティ/『マチネの終わりに（2019）』を見て

時刻は日本時間で午前5時半を迎えた。いよいよあと3時間弱で日本に到着する。

アムステルダム空港でKLMの機内に乗った時、ある考えが自分に訪れた。自分はどうやら恐れていたらしい。怖かったということがわかった。日本に帰ることが。そこからはしばらくその恐れについて考えていた。自分は何を恐れ、何を怖がっていたのだろうか。

この9年間、日本に戻る際に、そして日本から自分の本来の生活地に戻る際に、何とも言えない感覚に囚われていた。その感覚の正体は、どうやら自分が抱えていたある恐れにあったことがふとわかったのである。それは記述を退けるような内容の恐れであり、今もまだその恐れの正体は分からないと言っていいかもしれない。恐れの要因たりうることはいくつも思いつくのだが、どうもそれらは真因たりえない。

そんなことを考えながら、その問題から離れた。すると先ほど機内で睡眠を取っていたときに、何かが氷解するような感覚があった。そこには静かな感動があったのである。今、この日記を書き始めて少しばかりの時間が経った。その間にもこのリアリティでは、誰かが笑い、誰かが泣いている。この間にも、ある生命が死に、ある生命が誕生している。笑いや涙、死と誕生がこのリアリティなのではなく、このリアリティはそれらを超えたものである。全体としてのリアリティだけがここにある。

時計の針を巻き戻してみる。先ほどの睡眠の前に、2本目の映画を見ていた。2本目に見ていたのは、西谷弘監督が制作した『マチネの終わりに（2019）』という映画である。これは、東京、パリ、ニューヨークを舞台にあるギタリストの男性とジャーナリストの女性の愛の物語を描いた芥川賞作家・平野啓一郎氏の小説をもとに作られたものだ。ここ最近見ていた映画とは異なるジャンルの映画である。この作品では、福山雅治さんがギタリスト役の蒔野聡史を演じ、石田ゆり子さんがジャーナリストの小峰洋子を演じている。東京、パリ、ニューヨークというのは自分にとってゆかりのある地であり、東京とニューヨークには実際に生活をしていたことがある。この作品を鑑賞しながら、人生の中に生じる出会いとすれ違いについて考えていた。

作品の中で、主人公の蒔野が述べた言葉が印象に残っている。それは時の流れについて、そして時の性質について考えさせられるものだった。その言葉が頭から離れず、ふと過去について思い出した。すると、その過去はもうそのときに経験していた過去ではなくなっていて、過去が絶えず新たな意味付けを伴って変化するものであることを知る。過去は本当に変わるらしい。起きた出来事そのものは変わらなかったとしても、その出来事を取り巻く意味や感覚は、確かに変化するものなのだ。今が変われば過去が変わるということ。それを示唆するような体験だった。

物語の後半で、蒔野がベートーヴェンのある言葉について解釈をしていた。ベートーヴェンが残した言葉は、時が経って初めてわかることがあるということを示唆するものだった。この日記の冒頭で書き留めていた、自分の中にある恐れもそうだった。9年の時間が経って初めて、今日その瞬間にわかるものがあったのである。何かをわかるためには、やはりそれ相応の時の発酵が必要なのだろう。

今、閉じていた窓のブラインダーを上げてみた。すると、先ほどまで真っ暗だった天空が明るみ始めていることに気づいた。地平線の向こう側が明るくなり始めていて、地平線が赤味を帯び始めている。そして地平線の上空がエメラルド色に変わり始めている。

地球の景色が変わった。今この瞬間にもそれは変わっていく。自分が変わった。今この瞬間にも自分は変わっていく。それがこの世界であり、自己なのだ。関空に向かうフライトの中で:2020/10/8(木)06:11

6309.【日本滞在記】コロナの検査結果が出るまでの一部始終

時刻は午前9時を迎えた。関空に到着する予定時刻は8:55だったが、フライトが順調に進み、予定よりも随分と早く到着した。関空に到着すると、まずは機内にいるマニラ行きの人たちがコロナの検査に案内されていった。その後しばらくして、ビジネスクラスから検査に向かった。

オランダでは現在このような検査は行われていないのではないかと思う──少なくとも日本から来る人に関しては検査がないように思う──。そうしたことから、どのような検査なのか幾分楽しみでもあり、幾分未知ゆえの何とも言えない緊張感があった。

まずは試験管と漏斗を係員の人に渡していただき、そこから唾液を採取するブースに向かって行った。私が入ったブースは6番である。ブースは仕切られていて、ブースの壁に向かって唾液を出し、試験管のある一定量まで出せた人からその試験管を検査にかけてもらう。ブースの壁には梅干しやレモンの写真が貼られていて、親切にも、「唾液が出にくい方は、アゴや耳あたりをマッサージしてください」という言葉が貼られていた。

いざ唾液を出せと言われると、ちょっとした抵抗感があり、すぐに唾液が出てこなかった。ブースの壁に貼られている梅干しとレモンの写真を見てなんとか唾液を出そうとしていると、ふとメタ認知が働いた。「自分はパブロフの犬か(笑)！(心理学者パブロフを参照)」と思わず笑いがこみ上げてきたのである。しばらくして唾液がある程度出たと思ったところで、後ろから係員の女性に声を掛けられた。

係員の女性:「どれくらい出ましたか？」

私:「これくらい出ました。まだダメですかね？」

係員の女性:「そうですね、もうちょっとですね～。綺麗な唾液が出ているので頑張ってください！」

なんだか嬉しいような嬉しくないような声を掛けていただいた。その後私は、再び梅干しとレモンの写真を眺め、アゴや耳の周りをマッサージし、なるべく早く唾液を出そうと頑張った。すると今度は男性の係員の方に声を掛けられた。

男性の係員:「6番の方いかがですか？」

私:「(ん？今自分はこのリアリティの中で「6番の方」なのだ)いや～、あと少しです。頑張って出します」

男性の係員:「焦らなくていいですよ～」

私:「どうもありがとうございます」

そのようなやり取りがあった後、なんとか唾液を指定された量まで出すことができた。そして検査員の方に渡した。そこからは検査結果を待つ必要があり、結果を待つ専用のスペースまで歩いて行った。何か特別な部屋のようなところで待つのかと思ったが、そうではなく、単に空港の2階のフロアの椅子に腰掛けて待つことになった。

検査結果は40〜50分で出るとのことであり、結果が出た人の番号がモニターで表示される仕組みになっていた。私は唾液を出したブースは6番だったが、検査の順番は7番だった。「ラッキーセブン」という数字であるが、これで結果が陽性だと洒落にならないと思っていた。

結果が出るまでは、どこか大学入試の結果が出るかのような、少し緊張した状態が続いていた。40分ほど待つのかと思ってしばらく目を閉じてゆっくりし、そこからはパソコンを開いて日記でも書こうと思って一連の日記を書いていた。

40分待つ前提でいたのだが、思いの外早く結果が出始めた。まず3番の方の表示がモニターに現れ、そこからは続々と一桁台の番号がモニターに表示された。すると、私の番号である7番は飛ばされ、8番と9番が表示された。「唾液を出すのに一苦労したから仕方ないよな…」と思って待っていると、そこからは二桁台の番号が現れ始めた。10、11、17、そこから10番台が続々表示されていき、自分の番号が表示されないので、「まさかのラッキーセブンが陽性か…」という不安が脳裏をよぎる。

するとようやく待ちに待った7番が表示された！私は係員の方に「7番です」と自分の番号を告げ、結果が報告される場所に通されることになった。結果を伝えてくれる方が白い長机に座っているのが見え、足早に近づいていき、お互いに笑顔で挨拶を交わした。

係員の女性:「はい、陰性です」

私:「そうですか、ありがとうございます」

結果は無事に陰性だった。陽性だったらどうしようという思いでいたが、結果が陰性で本当にホッとした遡れば14時間前にアムステルダムのスキポール空港でパスポートコントロールの係員と人と人とのコミュニケーションをしていたことについて書き留めていたように思う。関空でも確かに人と人と

のコミュニケーションがあったことは、日本到着後に最初に喜ばしいことであった。関空のラウンジ「比叡」にて:2020/10/8(木)11:13

6310.【日本滞在記】昨夜の家族団欒を振り返って/八木重吉の詩

時刻は午前2時半を迎えた。昨日無事に日本に到着し、今は実家にいる。

昨日日本に到着した時、関空の周りでは雨が降っていて、そして肌寒さを感じた。日本も随分と秋めいてきているのだなと思い、実家に到着してみたところ、昨日は実家の近辺も肌寒かった。ところが今日から数日間の天気予報を確認してみると、今日の最高気温は26度、明日に至っては28度まで上がるそうなので、とても暖かい。昨日は台風14号の影響もあって、関西地方では雨が降っていて、実家の周りも風が激しかった。幸いにもこの台風は中国地方に上陸することはなく、そのまま東の方へと抜けていくようだ。今も少し風の強さは残っているが、それもじきに止むであろう。

昨夜は久しぶりに家族団欒で夕食を楽しんだ。母が述べていたように、父の料理の技術が以前にも増して高まっていて、昨夜の夕食で出された料理のどれも大変美味であった。夕食を食べ始めたのは午後5時半であり、そこから積もり積もる話をしながら午後7時半過ぎまで夕食を楽しんだ。本日免許の更新がなければ、もっと遅くまで話していたであろう。

今日は、父に運転してもらう形で山口県総合交通センターに行く。朝一番で交通センターに行こうということになったので、朝6時に自宅を出発し、途中の高速のサービスエリアかどこかで休憩をしたりしながら交通センターに向かうことになった。そうしたこともあり、午前4時頃に起床する予定だったが、時差ぼけもあり、さらには昨夜は午後9時前に就寝したこともあり、今朝は随分と早く起床した。一度午前1時に起床して、そこからしばらく本を読んでいた。先ほど読んでいたのは、『八木重吉詩集』というものだ。

聖書を片手に絶えず信仰深く生き、若干29歳で永眠したこの詩人に以前から関心があった。八木の死生観や自然観に大変共感するものがあり、この詩集を一気に読み通した。いくつか印象に残っている詩とエッセーの一端を書き留めておきたい(現代語表記にしておく)。

・「本当に、自然に詩の生まれる日は、自分自らが遠いものになったと思う。命があることが確かに感じられる。自らが神の心の窓となり、私の詩は、私の持つ神の観念と同じ高さから流れ出づる」

・「私でもなく、私を動かすものでもなく、不思議なる両生の世界の一番柔らかな一番始めの、心踊る泉からものを言いたい」

今日はこれからいつものように早朝の作曲実践を行う。昨夜父に、30年前に父が描いた数々の原画を見せてもらい、霊感と刺激を大いに与えてもらった。何やら先月ぐらいから、昔描いた原画を額縁に入れ始めたらしく、すでにもう何点か作品が自宅の壁に飾ってある。ここからまだまだ額縁に入れていくらしく、家が父の作品を飾る小さな美術館になることを想像すると、とても素敵だと思う。

母を交えて、3人で創造性についてあれこれと話をする中で、父が「揺らぎ」や「アシンメトリー(非対称性)」と芸術との関係について言及していたことがとても印象に残っている。父が描くモチーフや色使いは、当時の父の何かしらの深層心理を表していたであろう点も興味深く思った。

10/13(火)に愛犬のゆずも連れて、家族全員で小松美羽さんの個展を見に、広島のウッドワン美術館に行くことが今からとても楽しみだ。山口県光市:2020/10/9(金)03:09

6311.【日本滞在記】免許の更新を終えて

時刻は午後4時を迎えた。今、母がピアノの練習をしていて、先ほどはカッチーニの「アヴェ・マリア」の演奏を聞かせてもらった。16世紀に活躍した作曲家の音色とは思えないような色彩豊かな音色であり、感銘を受けたので、母に楽譜を借りて、今夜にでも写譜をしておこうと思う。

今私は実家のバルコニーにいて、瀬戸内海を眺めながらこの日記を書いている。父がバルコニーにやってきて、今カボチャを天日干ししている。どうやら今夜は干し野菜の天ぷらを作ってくれるとのことであり、午前中の買い物の際に入手したノドグロという魚を使った料理を振る舞ってくれるそうだ。その他にもあと何品かの料理が出るとのことであり、今からとても楽しみだ。

今日は早朝の6時に自宅を出発し、父に交通センターまで連れて行ってもらい、無事に免許の更新を終えた。父が長らく通勤で使っていた高速や下道を走り、道中の景色を楽しんだ。免許の更新

の際に見せさせられる講習のビデオが意外にも面白く、そしてタメになった。5年前の更新の際にも講習としてビデオを見たが、その際よりも笑いの観点が入っていて、受講者に飽きさせない工夫をしているところが良かったように思う。

台風は中国地方を過ぎ去ったが、その余波がまだ残っている。いつもは穏やかな瀬戸内海も今日は波が荒い。実家に滞在期間中は、幸いにも晴れが続くとのことである。明日は散歩がてら、近くのユニクロに行き、必要なものを購入したいと思う。

ユニクロで思い出したが、今日は免許の更新を終えた後に、父が働いていたテルモの工場を見るために、山口テクノパークと宇部テクノパークを訪れた。その時に、ファーストリテーリングの拠点にも訪れたことをふと思い出した。父曰く、以前はグラウンドだった敷地が駐車場に変わっていて、従業員をさらに増やし、拡大化の路線を引き続き歩んでいることを感じた。また、建物に掲げられていた3つの旗がどれも「Uniqulo」と表記されていて、父と一緒に笑みをこぼした。

多くの会社は、日本国旗や「安全第一」のような旗を掲げているのだが、ファーストリテーリングは全てユニクロだったので思わず笑ってしまった。ファーストリテーリングにも意図があるだろうし、父と私が思わず笑ってしまったことにも理由がある。

普段両親は5時から夕食を食べているとのことであるから、それに合わせようと思う。今から入浴をして、夕食までの時間を読書をしながら待ち、今夜もまた会話の溢れる夕食を家族で楽しめればと思う。山口県光市:2020/10/9(金)16:12

6312.【日本滞在記】実家で過ごす穏やかな時間

時刻は午前4時半を迎えた。開かれた自室の窓から、瀬戸内海の穏やかな波音が聞こえてくる。この時間帯は辺りはまだ真っ暗であるが、落ち着いた雰囲気が辺りに漂っていることがわかる。自宅の目の前の瀬戸内海は、絶えず命を働かせている。その生命の脈動を感じる。

昨日は午後10時に就寝し、起床したのは午前4時だったので、ようやく本来の生活リズムに戻ってきた。昨日はまだ時差ぼけが厳しく、午前1時に起床し、昼前に睡魔に襲われることがあったが、今日からはもう普段のペースで生活をしていけそうである。ここからはまた自分のペースで自分の取り

組みに従事していこう。実家にいる間は創作活動はほどほどにしながらも、実家に置いている書籍を読める限り読んでおきたい。家族と会話を楽しむ時間や、愛犬と遊ぶ時間を最優先にする形で実家での残りの滞在期間を過ごしたい。

ここ数日間、父と母の生活の様子や2人との会話のやり取りを思い出すと、2人がとても充実した形で日々を過ごしていることがわかり、とても嬉しく思った。自分の内側が望むことに正直になってそれに従事していることが、2人の元気さと充実振りの源だろう。

父にも母にもやりたいことがたくさんあるようだ。この2日間の夕食では、そうした点が話題の1つに挙がっていた。父は再び絵画の創作を行うことを考えているようであり、昔のようにリアルな絵を描くことや、デジタルアートの創作にも関心があるようだ。すでにパソコンにはクリップスタジオPro（通称「クリスタプロ」）をインストールしているらしく、父が絵画の創作を再び始めるかもしれないことを嬉しく思う。また、小説のような文章執筆にも乗り出していく気があるらしく、昨夜はその点も話題に挙がった。父がどのような思いでその文章を執筆しようとしているのかを聞いたところ、それは出版するに値するものかと思われたので、ぜひ応援したいと思う。

その他にも、新しいボートを購入して釣りも復活させようかと考えているとのことであり、今夜は先日に釣ったアオリイカが夕食のメニューの1つとのことであり、とても楽しみだ。料理に関してもより一層探求をしていくとのことである。これまでレシピを残していたらしいのだが、アレンジのヴァリエーションが豊富らしく、レシピを残すのが大変になってきているとのことだが、ぜひ残しておいて欲しいと思う。いつか父が作った料理をレシピをもとに辿りながら自分でも料理の創作に乗り出す日が来るかもしれない。

母に関しても毎日ピアノの演奏を中心に、やりたいことに日々取り組んでいるようであり、とても充実していることが伝わってきた。ピアノの練習に関しては、以前よりも練習時間が増えており、それによって技術が向上し、それがピアノの演奏を通じて得られる充実感を増加させているようだった。そのサイクルは、まさに能力や知性の発達のお手本のようである。昨年よりもさらに集中して練習する時間が増えており、一番感銘を受けたのは、細切れ時間を巧く使ってピアノ練習をしていることだった。それによって細切れの練習に対して高く集中力を発揮することができているように感じた。2人

の日々の過ごし方から自分も学ぶことが多く、それを参考にしながら今日からの日々を充実感と共に生きていきたいと思う。山口県光市:2020/10/10(土)04:57

6313.【日本滞在記】美の危うさ

時刻は午前5時を迎えた。起床時に引き続き、瀬戸内海の穏やかな波音が聞こえてくる。実家に滞在中は天気が良い日が続き、とりわけ今日と明日は雲一つない晴れマークが付されている。

昨日と同様に、午前中や午後の読書はバルコニーで行ってもいいかもしれない。作曲や日記の執筆もバルコニーのテーブルで行うことを検討しよう。父がテーブルの上にパソコンを置くデスクを設置してくれ、それによって立ってパソコンを使うことができるようになった。実家にはバランスボールがないので、できるだけ立って読書や創作活動に取り組んでいくことができればと思う。

本日が実家での滞在3日目となるが、まだ印象に残る夢を見ていない。昨夜から今朝にかけて熟睡しており、それは低反発のベッドや枕のおかげかと思う。フローニンゲンの自宅の枕も低反発であるが、ベッドでは普通のものであるから、今度の引越し先かそれ以降においては、睡眠の質を高めるために、ベッドのマットを低反発のこだわったものにしたいと思う。

昨日ふと、作曲家の武満徹が夢を題材に作曲をしていたことを思い出した。武満は、さらに数字も意識しながら作曲に取り組んでいた。夢と数字というのは私も大切にしているものであり、今後はそれらを題材にした曲を作ってみたいと思う。これまでもそうした試みはあったが、今後はそれをより意識し、夢と数字を形にしていく自分なりのアイデアや技術を高めていきたいと思う。

昨日、『危険な「美学」』と『作曲の思想　音楽·知のメモリア』いう書籍を読み終えた。前者は、一般的な美学書とは異なり、美の負の側面、そして危険な側面を取り上げている興味深い書籍である。本書を読みながら、真と善が欠落した状態で美を追求していくことの危険さを思った。本書でも言及があるように、美が戦争を駆り立てるものであったという歴史的事象を思い出す。

著者が指摘するように、アニメ映画『風立ちぬ』において、飛行機設計者の主人公は、美しい飛行機を作ることに没頭していたが、その飛行機がそもそも戦争のために使われるという発想がひどく欠落していた。本来、自己を省察していく際には、美を司る感性よりも、真と善を司る知性と理性を

働かせることになる。美への没頭は、私たちに生の歓喜や崇高な恍惚感を感じさせたりするが、知性と理性の欠落した美的探求は、自己省察の不足さゆえに、危険な道に入り込んでしまうことがある点に注意をしなければならないだろう。

そうした美の罠に入り込んでしまうことを防ぐ上で、知性と理性を用いた自己内省を行っていくことが大切になるだろう。美的体験への没入と自己省察の双方を行ったり来たりするような形で、今日からの日々を過ごしていこう。山口県光市:2020/10/10(土)05:22

6314.【日本滞在記】印象的なビジョンを知覚する仮眠体験

時刻は午後2時を迎えた。ベッドから何冊かの書籍が転がり落ちる音が聞こえて仮眠から目覚めた。仮眠中、印象に残るビジョンを見ていた。それはもう夢さながらの知覚体験だった。ちょうど今月の半ばに行われる対談講演会の会場に早めに到着した私は、会場の下見をしに、講演が行われる部屋を覗いた。ドアを少しばかり開いて中を覗いたところ、開演1時間以上前にもかかわらず、もうそこには何人かの参加者の方々がいて、少しばかり驚いた。

参加者の方々は私が扉を開けたことに気づかなかったので、私は扉をそっと閉めて別室に移った。すると私の体は、東京のどこかの駅のプラットホームの上にいた。ちょうど良いタイミングで、目的駅に向かう特急列車がやってきた。いや厳密には、その列車は目的駅を通過してしまう特急だったかもしれないが、急いでいたので私はその列車に飛び乗った。

列車の中のモニター画面を見ると、ちゃんとその列車は目的駅に止まることを知ってホッとした。そのような場面があった後に、私の体は美術館のような建物の中にあった。私の横には両親がいて、私たちは美術館を楽しみにやって来たようだった。館内は空間も芸術的に作られていた。

作品鑑賞をいざ始めようとしたときに、父が「あっ、ここにいる！」と述べた。父が指差したのは部屋の隅の角なのだが、そこには何もいないように思えた。だが父は、そこに何かがいると述べる。何やら、ヴァーチャルテクノロジーの技術を使い、特殊なメガネをかけながら行うゲームが流行っているらしく、本来はその特殊なメガネをかけないと見えないモンスターのキャラクターが父には裸眼で見えるらしかった。母は、「怖いから、見えるとか言うのはやめてよ」と述べており、母は私と同じく何も見えないようだった。父は笑みを浮かべながら、部屋の隅の角に腰をかがめて、手を差し出した。

すると、バーチャル空間でそのキャラクターに噛みつかれたらしく、痛そうにして手を引っ込めた。その瞬間に私はハッとして、仮眠から目覚めた。

すると、午前中から部屋中にある段ボールを開けて取り出した本で埋もれたベッドから、書籍が転がり落ちる音が聞こえた。そのような形で仮眠から目覚めたのである。ここ数日は夢を見ていなかったので、その代わりとなるようなビジョンだった。両親が登場したこと、そして今月の半ばの講演会がモチーフになっていることなどを見ると、もう日本にやって来たことが無意識の世界に影響を与えていることがわかる。

正直なところ、今とても不思議な感覚が自分の内側にあり、その感覚は内側を外側から包んでもいる。端的には、夢見心地の感覚である。より厳密には、夢を見ている自己が夢見心地を感じるという二重の感覚がある。それは静かな幸福感を伴っている。オランダで感じるくつろぎとはまた違うくつろぎが実家にあり、そこに魂が安住していて、それによって内から外に自ずから開いていく不思議な感覚がある。その感覚は、間違いなく魂を別の場所に連れて行ってくれている。それは魂を育みながらにして、より高き場所に導くことにつながる感覚であると確信している。山口県光市:2020/10/10(土)14:17

6315.【日本滞在記】『クリーピー 偽りの隣人』を見て/犯罪心理学の学習に向けて

仮眠から目覚めると、母が演奏するジュリオ·カッチーニの『アヴェ·マリア』がピアノ曲が聴こえて来た。ちょうど昨夜、母から楽譜を借りて、この曲を今朝方写譜し、楽譜を再びピアノの前に戻しておいたのは午前中のことだった。母は最近毎日この曲を練習曲の1つに加えているらしい。もう1つは、バッハの『主よ、人の望みの喜びよ』のピアノ曲である。

今は午後2時半を迎えようとしていて、ここから夕食までの間、母は午前中と同様に、ピアノの練習に取り組むだろう。午後の練習は洗濯物の取り入れなどの中断を挟みながら進められることになる。仮眠から目覚め、父の部屋を覗くと、父も仮眠を取っていたようだったが、つい今し方目覚めた。ここから父は夕食の準備に取り掛かる。下準備に時間がかかる際には、午後2時から台所に立

つとのことであり、今日と明日は下準備に時間がかかるものを作ってくれるらしく、ここから夕食まで父は台所に立つようだ。

昨日父が述べていたのだが、父にとっては、料理もまた創作であり、料理を作っている最中には幸福感があるとのことだった。幸福感を感じられること。それこそがまさにその活動がその人にとっての創作活動であることを示している。

仮眠前に、黒沢清が制作した『クリーピー 偽りの隣人』というサスペンス映画を見ていた。この作品は、日本ミステリー文学大賞新人賞を受賞した前川裕氏の小説作品がもとになっている。ストーリーは、元刑事の犯罪心理学者である高倉が、刑事時代の同僚である野上から、6年前に起きた一家失踪事件の分析を依頼されるところから始まる。その事件の唯一の生き残りである長女の記憶を探るが真相にたどり着けずにいたところ、新居に引っ越した高倉と妻の康子は、隣人の西野一家にどこか違和感を感じ始める。ある日、高倉夫妻の家に西野の娘が駆け込んできて、実は西野が父親ではなく全くの他人であるという驚くべき事実を打ち明ける。そこからストーリーが佳境に入っていく。

ちょうど偶然ながら、数日前に新大阪駅の書店をぶらぶらしていた時に、犯罪心理学の書籍に目が止まり、その書籍をパラパラと眺めていた。結局、その書籍を購入することはせず、本棚にその書籍を戻し、映画評論関係の書籍を2冊ほど購入したのだが、今回の映画作品を見て、改めて犯罪心理学の学習もしていこうと思った。以前からサイコパスやソシオパスの心理特性には関心があって、それに関する書籍を読んでいたのだが、犯罪心理学についてはまだ何も専門書を読んだことがなかった。今回は、日本語で犯罪心理学の書籍を1冊ぐらい購入しても良いかもしれない。

本腰を入れてこの領域について理解を深めようと思ったら、いつものように英語空間にアクセスして、必要な専門書を購入していけば良い。ざっと調べてみると、犯罪心理学はやはり欧米に歴史があるので、日本語で読める犯罪心理学の書籍はとても少ない。前々から気づいていたが、犯罪心理学の基礎をわかっていないと汲み取れない映画作品がかなりあることに気づく。そうした作品からより多くのことを汲み取るために、犯罪心理の基礎を学ぶ必然性が自分にやって来たことは嬉しい。ここからまた書籍を吟味したいと思う。山口県光市：2020/10/10（土）14:36

6316.【日本滞在記】観照生活と生の実感

時刻は午前4時を迎えた。今、瀬戸内海の優しい波の音が聞こえてくる。辺りはまだ真っ暗で、涼しい風が室内に入ってくる。日本の気温は寒くもなく、暑くもなくといったものであり、本当に良い時期に帰って来たなと思う。今日も晴天に恵まれるようであり、秋晴れの日を楽しみたい。

のんびりと日記を執筆したり、創作活動をしたり、読書をする。そしてもちろん、家族との会話の時間を楽しみたいと思う。

昨夜のディナーもまた非常に凝ったものだったが、今夜のディナーも父が相当に凝ったものを作ってくれるようなので楽しみである。まだ時刻は午前4時だが、父はこれから目の前の砂浜に散歩に出かけていく。そこから帰って来たら筋トレをして、エスプレッソを淹れることが日課のようだ。父が淹れてくれるエスプレッソは美味であり、それを飲むのは毎朝の楽しみの1つである。

オランダでの生活とは少し違った形で、古代ギリシャ人が大切にしていた観照生活を実家で送っている。何かを求めてあくせくするのではなく、のんびりとした穏やかな時間の中で、1つ1つの体験を味わうような時間の過ごし方が実現されている。そうした観照生活の中で、運命の守護霊であるダイモーンの手招きと呼び声に応じていく。昨日は和書を20冊ぐらい読み、今日もまたそれくらいかそれ以上読もうと思う。

オランダには和書の良書だけをいつも持って帰るようにしているのだが、実家にもまだまだたくさんの良書があることに改めて気づき、今はそれらの再読をどんどん進めている。昔読んであまり意味のわからなかったことが、今随分と理解できるようになっていたり、新たな発見が多々ある姿を見ると、自分の進歩を見る。読書を通じて自らを肥やし、進歩が実現されていくだけではなく、読書によって進歩の確認と、これからの進歩に向けた一歩が踏み出されていく。

昨日、フローを経験しやすい性格特性を、「オートテリック・パーソナリティ」と呼ぶことを知った。自分にはひょっとすると、この性格特性があるかもしれない。美的体験とは、この生を生きるに値するものに感じさせてくれるものである。創作活動はまさにそうした美的体験を大なり小なり感じさせてくれる。創作活動の最中は、いつも小さなフロー体験をしており、それは美的体験と密接につながっている。そうした体験を通じて、この生が持つ素晴らしさの一端を垣間見る。

今日もまた、この生が生きるに値するものであるという実感を得ながら、自分の取り組みを少しずつ前に進めていく。山口県光市:2020/10/11(日)04:22

6317.【日本滞在記】交差する豊かな時間の中で/父の本棚より

時刻は午前4時半を迎えた。オランダにいる時と変わらず、ココナッツオイルでオイルプリングをしながらヨガをし、その後歯磨きをして、目覚めの水を一気に飲んだ。

母の部屋を覗くと、母がパソコンを開いて音楽関係の情報を得ているようだった。クラシック音楽に関することか、ピアノ演奏に関することについて調べ物をしていたのだろう。そして今、新聞を取りに1階に降りて行った。母を追うようにして、トイプードルの愛犬が玄関に向かってひたひたと歩く音が聞こえて来る。

日常。家族の各々が日常の習慣的な行動を取りながら、それぞれの人生の時間がそれぞれに流れていく。そして、各人の人生の流れが時に交差しながら進んでいく。実家では、そうした交差する豊かな時間の中を生きることができている。瀬戸内海の波のように優しげな充実感が自己を包む。

私のベッドの上は、どうも愛犬の香りがする。私が来る前や、来てからも、時折愛犬がベッドの上に遊びに来ていたことがわかる。

昨日ふと、現在の社会の中で本当に怖いのは、コロナというウィルスの振る舞いではなくて、その振る舞いに影響される人間の振る舞いだということを思った。コロナによって喚起された不安や恐怖による非合理的な振る舞いや狂気的な振る舞いの方が恐ろしい。そしてそれが集団的非合理と集団的狂気を生み出すことが怖い。

昨日、西田幾多郎の一連の書籍を読み返す中で、西田幾多郎が金沢にゆかりのあることを知った。今回の一時帰国では金沢にも滞在するので、西田幾多郎の記念館がないかと調べてみたところ、見事にあった。そこは「石川県西田幾多郎記念哲学館」という。金沢駅から電車に乗って、1時間弱で到着することができるとのことなので、金沢滞在中に是非とも足を運びたい。

金沢では、西田幾多郎記念館だけではなく、鈴木大拙記念館にも行く。今回金沢に足を運ぶのは、父方の下り藤の家紋を持つ加藤家のルーツを感じるためであり、実家に帰って来た初日に、父が色々と調べた加藤家のルーツについて教えてもらった。それに関する書籍とプリントアウトされたインターネットの記事を借り、今夜にでもそれらに目を通しておこうと思う。福井県に行くのもルーツを辿るためであり、そこでは母方の上り藤のルーツを感じる旅を行う。

石川県では、日本の哲学に多大な貢献を果たした2人の巨人の跡を辿る旅をする。実家に置いたままにしていた鈴木大拙の『日本的霊性』はオランダに持って帰ろうかと思っていて、『東洋的な見方』については、今日か明日にでも再読をしようと思う。

昨日父の本棚を眺めていると、本棚の中にに、ローレン･アイズリー（ソロー、エマーソンの系譜を継ぐナチュアリストであり、エッセイストかつ詩人）の『夜の国：心の森羅万象をめぐって』『星投げびと：コスタベルの浜辺から』という書籍があった。アイズリーがソローやエマーソンの系譜を継ぎ、生命の本質を探究する人間であったことを知り、それらのエッセイと短編集にとても関心を持った。今回の滞在中に読めるかわからないが、いつかそれらの書籍を読む日がきっとやって来るだろうと思う。山口県光市：2020/10/11（日）04:50

6318.【日本滞在記】『夢（1990）』を見て

—

海岸を散歩していると、少年がヒトデを海に投げていた。

何をしているのかと尋ねると、少年は「海に戻してやらないとヒトデが死んでしまう」と答えた。

私はそんなことをしても、海岸中がヒトデだらけなんだから、すべてのヒトデを助けられないし、意味がないだろうと言うと少年は少し考え、またヒトデを海に投げた。

そして私にこう言ったのだ。

「でも今投げたヒトデにとっては意味があるでしょ」と。

—ローレン･アイズリー

時刻は午後2時を迎えた。つい今し方、仮眠から目覚めた。

今、父はキッチンで夕食の準備をせっせと行っていて、母はバッハのピアノ曲を演奏している。

仮眠の前に、黒澤明監督の『夢（1990）』という作品を見た。これは、黒澤監督自身が実際に見た夢の世界を8つのエピソードで綴るオムニバスファンタジー作品である。端的には、黒澤監督の美意識と現代社会への問題意識が見事に体現されている素晴らしい作品だった。作品中の自然美の映像や、おどろおどろしい場面の映像が見事であった。

8つの夢のうち、幻想的な雰囲気を持つ場面、そして雅楽が流れる場面がとても印象に残っている。断片的であるが、印象に残っているシーンをその他にも列挙しておくと、死してなお、無言で忠誠を誓う兵隊たちの姿、原発による放射能の拡散の問題に対して警鐘を鳴らすような場面、そしてゴッホの絵の中に入り込む場面などがとても印象的だ。

何より、最後のエピソードの中で登場した祭りのシーンは、解放と浄化のモチーフを表していたのではないかと思い、自分自身が解放と浄化を体験するかのようであった。また、最後に主人公が綺麗な川を渡っていくシーンは、祭りによって此岸から彼岸へ渡り、そこから再び此岸へ戻って来たことを象徴していたのではないかと思い、自らがそれらの2つの世界を行き来した感覚があった。黒澤監督の世界観には引き込まれるものがあったので、早速いくつかの作品をマイリストの登録した。近々それらの作品を見ていこう。

午前中に、埴谷雄高先生の『不合理ゆえに吾信ず』を読み、テイヤール･ド･シャルダンの思想に関して言及のあった『人間回復の経営学』を読み返していた。それ以外にも15冊ぐらいを午前中に読んでいた。以前から購入しようと思っていた親鸞の『歎異抄』が父の本棚にあったので、それも近日中に一読しておこうかと思う。今道友信先生の『東洋の美学』とジャック･アタリの『21世紀の歴史』も父の本棚にあったが、それらは自分の書籍なので、再度中身を眺めてみて、オランダに持って帰るかを判断したい。

ここから夕食までの時間、そして夕食後から就寝にかけての時間は全て読書に充てていこう。あと50冊ほど再読しておきたい書籍があるので、それらの再読を明々後日までに行っておく必要がある。今、養分を全身で吸収する植物のように読書が進んでいる。山口県光市：2020/10/11（日）14:29

6319.【日本滞在記】今日の読書から

時刻は午前7時半を迎えようとしている時刻は午後6時半を迎えた。今日もまた午後5時から家族団欒で夕食を摂った。本日の夕食のメインは、様々な魚介類を使ったブイヤベースを父が作ってくれた。それは大変美味であり、残ったスープは、明日にパエリアとして活用するとのことである。

今日も読書が大変捗った。今日は読書に集中したかったこともあり、映画は1本だけ見ることにした。読書に関して色々と得るものや考えさせられることがあったので、それらを取り止めもなく書き留めておきたい。

有益なものは全て真理であるというプラグマティズム的発想について少し考えた後、暗黙知を豊かにするために、多様な体験を積み、それらを経験に昇華させていくことについて考えていた。西田幾多郎は、経験のより深部･暗部に降りていくことによって、形なきものを見、声なきものの声を聞くような、経験の純化が実現されると指摘した。経験の純化の過程で暗黙知がさらに豊かなものになり、暗黙知の獲得過程の中で経験の純化が進んでいくのだろう。

ゲオルク･ジンメルが言うように、人間は境界によって限界づけられた存在であり、同時に境界線を絶えず超えていく超越的な存在でもある。人間は、生と死さえも超えていくような存在なのだ。つまり、人間は生まれながらにして越境者なのである。今とここを起点にして、絶えず越境を続けていく存在。それが人間存在である。境界は絶えず超えられていくという性質を考えてみると、それは虚構的なものなのだということに気づく。真なるものは越境という行為の持続そのものにあると言えるかもしれない。

ジンメルの提唱した「生の弁証法」は、高次元での和解を知らない永遠の自己超越の運動であるとされている。弁証法と言えばヘーゲルの発想であるが、ヘーゲルは、矛盾は自己が主体的に発達していくための原動力であるとみなしている。ジンメルとヘーゲルの弁証法的な思考を総合的に考えてみると、人間は絶えず矛盾を抱え、矛盾を原動力にしながら、自己超越の運動を継続させていく存在だということが見えてくる弁証法思考については、ロイ･バスカーもその思想を受け継いでいる。バスカーが提唱した「超越的実在論（transcendental realism）」において、現実の様々な現象の深層に潜んでいるメカニズムを直感的に把握して現象を説明していくことが大切にされている。

超越論的実在論とは、実験室で正確に再現やコントロールができない個人的な現象及び社会的な現象というのは、私たちの主観を通して存在するだけではなく、それとは別に、独立した客観的な存在を持つのだという発想を取る。

そのようなことを考えながら、モデル化について考えていた。何らかの現象がモデル化されると、そのモデルからこぼれ落ちる現象について、私たちは盲目的になってしまう。そう考えると、モデル化は現象に光を当てると共に、影をもたらすことでもあると言えるのではないか。これは言語にせよ、非言語にせよ、形象活動全般に当てはまることである。つまり、何かを形にした瞬間に影が生まれるということである。しかし一方で、ある形を作らなければその影はできず、その形と影が生まれたことによって、また新たな形が生まれる可能性が生まれたことを考えてみると、形象化という活動そのものは弁証法的なものであり、創造的なものであることがわかる。山口県光市:2020/10/11(日)18:52

6320.【日本滞在記】今朝方の夢/自己超出体験

時刻は午前4時を迎えた。つい今し方、起床直後のヨガの実践を終えたところである。

日本に帰って来てから初めての週末が終わり、今日からは新たな週を迎える。新たな週を迎えたからといって何か変わりがあるわけではない。平日･休日･祝日という人為的な区別とはもはや全く関係なく、自分の日々は水の如く淡々と進んでいく。

今朝方は不思議な夢を見ていた。舞台は中国の工業地帯であり、私は工場が乱立する場所の道路に立ちながら、近くにいた知人に何かを伝えていた。そんな場面があった後、気がつくと、海が近くにある宿泊施設に私はいた。そこは研修施設として使われていて、小中高時代の友人や先輩たちの多くがそこに宿泊していた。

ちょうど何かの合宿をしているようだった。私は、中学時代のバスケ部の1学年上のキャプテンと話をしていて、キャプテンが私に英語に関する質問をして来た。

キャプテン:「これから年末の休みに入ると思うんだけど、外国人の友人に、「原始人になるなよ」と英語で伝えたいんだけど、何て言うの？」

私:「えっ、あぁ、少し意訳になりますけど、“Keep being as you are.” とかでいいかと思いますよ。あえて「原始人」を無理に訳す必要なく、「今のままでいてね」と伝えればいいんじゃないかと」

すると、私たちと同い年ぐらいの見知らぬ外国人の女性がやって来て、「そうですね、“Keep being as you are.”でいいと思いますよ」と述べた。その瞬間に、私たちの後ろから、バスケ部に所属していた同じ学年のある友人(KM)が現れ、私たちの横を全速力でかけて行き、サーフィンボードを持って海に飛び込んでいった。彼はそのまま沖の方に向かって行き、呼び止めて話でもしようと思ったのだが、もう引き返せないほど遠くにいた。覚えていることは少ないが、今朝方はそのような夢を見ていた。

先ほどヨガをしているときに、自己超出体験をした。まさに昨日、ゲオルク·ジンメルの生の弁証法について書いていたような越境体験がそこに起きていた。端的には、自己が完全にこの自己から抜け出して行き、そこにいる自己の全存在を完全に客体化しているという体験だ。その間には、客体化している自己は天空のような広大さを持っていて、静寂さと共に、実に伸びやかな感覚があった。数ヶ月に一度このような体験をする。

インテグラル理論の用語で言えば、目撃者の意識体験だと言えるだろうか。そしてそれは、少しばかり非二元の意識状態にもかかっているような体験だった。小さな自我に囚われず、自身を天地自然に委ねて生きていくこと。まさに則天去私的な生き方を続けていく。先ほどの自己超出体験は、そうした生き方にとって大切な体験である。この体験を経れば経るほど、自我からの囚われから脱却していく。次に大切になるのは、囚われから解放された自己が天地自然的大いなる存在と一体となって生きることであり、そこでは非二元の状態が鍵を握る。山口県光市:2020/10/12(月)04:25